

いる。一方的に何かをしてもらうつもりはなく、支援してもらったら必ず何かの形で返したいと思っている。リクエストがあれば震災の経験を語るし、相馬にきたいという人がいれば仕事を休んでも、案内する。一日つぶしてでもお互い様という心の大切さを伝えたいと思っている。宮城県のス Copp 団の団長さんとお会いする機会があった。団長さんも「復旧とか復興ではないんだ。お互い様って言う気持ちなんだよ」と、自分がずっと思っていた事と同じことを仰っていた。これから日本が良い方へ向いていくためのキーワードは「お互い様」だと思っている。今回の大震災では多くの命が奪われ、その方々や家族の心情を察すると軽々しいことは言えないが、生き残った我々はこの体験から気づいたことを生かしていかなければならない。私にとってその答えが「お互い様」である。この気持ちを持つ

ことを実践し発信していく事が福島・東北の復興に繋がり、亡くなった方々へのせめてもの報いだと思っている。



犬の避難所

NPO

震災後の思い、志が未来に伝わるものに

3.11あの時
P68 Report. 31 の続きです

相馬市

新妻 香織 NPO 法人フー太郎の森基金

取材日 2012.09.14

1998年、アフリカの緑化と水源開発を行なう「NPO 法人フー太郎の森基金」を創設、代表。国内においては2000年松川浦の環境保護団体「はぜっ子倶楽部」創設、代表。東日本大震災後は、「(社) Fukushima市民発電」「(社) 東北お遍路プロジェクト」を創設、ともに理事長。また相馬市市議会議員になり、津波と原発事故の被災地復興に取り組む。

現在までの活動

津波で故郷も実家も流されてしまった。事務所を置いている自宅は2軒前で津波が止まってくれ、たまたま残った。周りの家は破壊され家族を失った方もいて、あまりの惨状に涙も出なかった。そのような状況の時には、私は落ち込む前に逆に何かやらなければとアドレナリンが出る性格のようだ。震災以降、猛烈に走ってきた。しかし最近になって震災の映像を見ながら話している時、声が詰まって話ができなくなることがある。今までは緊張していたのだなということがよく分かった。

私が属する「フー太郎の森基金」と「はぜっ子倶楽部」の相馬市のメンバーを中心に、鎌倉からやってくる青年ら、県外の会員、ボランティアセンターから派遣されるボランティアの皆さんらが加わって、様々な支援活動を行なった。まず緊急支援として、炊き出しや瓦礫の撤去を行なった。次は避難所から仮設住宅へ移る人たちの生活支援をする



ため、全国から日用品を集めて配った。また在宅で被災した人たちが何の支援も受けていなかったため、全戸アンケートを取り、必要なものを早稲田のマッチングサイトなどから支援を受け届けた。

この辺りではスーパーマーケットが2軒流されて

しまっていたので、買い物は3.5km先のスーパーまで行かなければならなかった。市民からは「タイヤの付いているものなら何でも欲しい」そんな声が聞かれた。そこで全国からきれいにした放置自転車を600台いただいた。中には新品の提供もあり、通学や通勤、買い物に、皆さんが利用して下さっていた。

物資の提供の次に取り組んだのが、町づくりのためのゼミナールだ。私たちは故郷を失くしてしまったが、それをどのように再建していくのか、市民も勉強して声を市に上げていきたいと思います、「松川浦の未来を語るゼミナール」と題して2011年8月から3月まで毎月1回実施した。登録は120名程度で毎回の参加者は50人前後だった。この時期の福島だからこそ来てもらえるという、著名なオピニオンリーダーらが、建築や町づくり、ナショナルトラストといった分野について熱心に語ってくれた。これは私自身にとっても非常に勉強になった。

市議会議員への立候補、当選

今回の震災はあまりにも破壊が大きすぎて、市民活動のレベルでは解決できない問題が多いことを痛いほど感じた。市民活動でできることはほんの僅かだった。確かに物資の配布やセミナーの開催も喜ばれてはいたが、実際に上がってきた声を市につなごうとしてもなかなかパイプができなかった。市にオブザーバーとしての参加を要請しても駄目。都市計画審議会の委員の公募があり、ここに入れば町づくりの声を上げられるかと思ひ応募したが落ちてしまった。どうしても次のステップが踏み出せず、八方ふさがりの状態だった。

そんな時、2011年9月のニュースで県議会議員の選挙と市議会議員の選挙を11月20日に同日で行なうという報道が流れた。相馬市の市議会議員の選挙は4月の予定だったが震災で延び延びになっていた。1年ぐらい延びるだろうと言われていたが、それがいよいよ行なわれるというのだ。「何だ、こんな方法もあったではないか!」と思った。私が議員になれば市民の声が市に届く。恐らく今後の4年間で被災地のほとんどの計画が立つだろう、何事も計画が全てであって、計画ができてしまってからでは動かせない。決まった後で、こういう風になりましたと言われても、私たちはどうしようもない。

その夕飯時のニュースが終わるか終わらないかのうちに、「私、選挙に出ます。」と家族に宣言した。みんな驚いた。普段私のやることに理解のある夫は「絶対反対だ!」と言った。しかし、「今やらなければ私はきっと後悔する。」と立候補を決意した。



撮影：2011.7.16 全国から送られた自転車を相馬の被災者600名に配布した

もともと政治家は嫌いだった。世の中は市民活動で変えていけると、1988年からNGOを作り活動してきたが、その限界を今回の震災で思い知らされた。政治家を嫌いなどと言っている場合ではない。選挙までは時間がなかった。おまけに経験もない。資金もない。方法も知らなかった。20代ではないが「20代コネなしが市議会議員になる方法」という本を一冊だけ読んで参考にした。昔編集者だった頃の友人のカメラマンが、ポスターの写真を撮りに東京から飛んできてくれた。選対委員長は最後まで居なかった。被災した同級生や支援活動に取り組む仲間たち、隣組のご近所がみんな手伝いに来てくれた。仮設から通いながら同級生がウグイス嬢をやってくれ、強面の漁師の同級生も白手袋をして選挙カーから手を振ってくれた。周りからは「票が減るからやめろ」などとからかわれていた。最後まで何をやってよいのかわからなかった。出陣式や事務所開きなど何をどうすればよいか勝手がわからず、「知り合いの議員に聞いてみる」と前日の夜に電話したりした。不謹慎だが、そんなこと一つ一つが愉快だった。だけどパンフレットだけは誰にも負けずに勝負できるものを作った。これを見たら私に投票してくれるだろうと自信の持てるものを作り、皆さんに見てもらうことを徹底した。結果、私は3位で当選させていただいた。みんなの力が私をここまで導いてくれていた。

市民活動と議員としての活動

議員になった後も、市民活動は継続して行なっている。たとえばエチオピアでの緑化事業。JICAから5,000万円の予算を受け、3年間で150万本の苗木を植える計画で、初年度は50万本、2年目は70万本、3年目は30万本という3年計画が

あった。そのうちの2年目の一番重要な年度に震災が起き、しかも3月は、エチオピアは苗木づくりの一番大切な時期だった。呆れられるが、原発が爆発している時に、どうやって海外送金するかを話し合っていた。

どう見ても相馬市の状況はエチオピアより悲惨だった。こういう状況の中でもエチオピアに支援を続けていくべきか私は悩む。自分一人で始めた事業が、エチオピアの世界遺産の村を緑に変え、外務大臣から表彰されるまでの事業になったことは誇るべきことでもある。会員の皆さんのためにも何とか継続したいと考えている。

それ以外にも被災地では「東北お遍路プロジェクト」をスタートさせている。「お遍路」というのは究極のスタンプラリーだと私は思っている。1カ所でも抜けていたら、必ずそこに行きたいと人々は考えるはずだ。そうすることで東北の被災地に、福島に、人を呼び込めると思うのだ。現在青森、岩手、宮城、福島の津波被災地の市町村に2カ所程度の巡礼ポイントを設けて、それらを結ぶ道を作ろうと計画している。このプロジェクトの説明のために青森、岩手を訪問した際「我々は自分たちの町をどう復興させるかだけを考えていた。東北の被災地全体で観光客を招こうという発想がなかった。」と喜んでいただいた。

震災後の私の行動の原動力は、「償い」かもしれない。なぜ、こんなに自分を駆り立てられるのかというと、次世代に対して取り返しの付かないことをしてしまった、償いきれないことをしてしまったという思いがあるからだ。

大学2年の時に原発のことを知ってからずっと反原発だ。12年前から住まいには太陽光発電を設置し原発の電気は使わないようにしようと思ってきた。プルサーマル導入に際しても、県民の意見を聞く会で反対を唱えてきた。原発事故はこういう電気の使い方をしてきた私たちの世代すべての責任でもある。震災後、10日間相馬を離れていたが、帰ってくる決心をしたのも、次世代に1mmでも良い相馬市を手渡さなければならないという思いからだ。

福島県は国に先んじて2040年までに原発ゼロを決定した。福島が変わらなければ日本は変わらないだろう。形にしていかなければ何も変わっていない。言っているだけではだめだ。まず実践しよう、市民発電会社を作り、一般社団法人化する準備を行なっている。最初は72kwだけが工場の屋根に設置した太陽光発電から始め、次は小水力発電を目指そうと考えている。南ドイツのシェーナウは1人の主婦の「原発は嫌だ」という声から自然エネルギー100%の町になった。相馬市を日本のシェーナウにしようと呼びかけている。

震災後、福島の子どもたちは福島というだけで重い十字架を背負ってしまった。福島の子どもたちをどう育てていくかというのが私たちの大きな課題だ。子どもたちには広い視野を持って強く生きて欲しい。自分で道を切り開くために学力、体力をつけさせ、地道な努力をすることや相手を思いやる豊かな心も必要だ。そんなことから相馬の子どもたちはみんな馬に乗れるようにしたい。相馬野馬追祭りの後継者を育成できるのはもちろんだが、馬場を作って常に馬に接することができればホースセラピーにもなる。そういう場所を作りたいと目論んでいる。その他まだ形になっていないプロジェクトがたくさんある。

これから

松川浦は東北で一番生物多様性が高い干潟だった。しかし震災直後の松川浦は、その楽園の様相が消え失せ、どこか別の惑星のように見えた。砂州は決壊して外洋とつながり、白砂青松の松林は津波で全て無くなった。現在砂州の土盛りの計画が進行中で、今が正念場と思っている。移行帯をどう創出するか、林帯幅の考慮も必要だ。前の状態に復旧すればよいという発想ではなく、どうせやるのであれば後世の人たちが「いいものを残してくれた」と言ってくれるものにしたい。それは私がやるべきことだと思っている。またまちづくり協議会やまちづくり条例を作ったり、議員だからこその仕事をやっていこうと思っている。私たちが震災後どんな思いで町を再建していったか、その志が未来に伝わるものになればいいと願っている。



撮影：2012.2.22 「東北お遍路プロジェクト」を始めるに当たり、青森、岩手の被災全市町村を訪問して説明に歩いた